

作品の中の女性

——一茶の場合——

黄色瑞華

《Summary》

Women in Literary Works
— in case of Issa's —

Zuiko Ohshiki*

Observation is very frequently made about people's daily life in Issa's SHICHIBAN NIKKI. This increases very much in HACHIBAN NIKKI, showing daily life of those days. This paper examines lines in the works relating to women.

Lines about women were all about women's low status in the society and their tough life, none about their happy life. This is similar to what is depicted in the latter half of SHICHIBANN NIKKI and HACHIBANN NIKKI.

*城西大学教授・主任研究員

1

いわゆる一茶調の起点を江戸葛飾派の俳風に求め、それは其角風に談林調を加えたと評される江戸座の俳風にさかのぼることができる。

『文化句帳』以降の一茶は、葛飾派の俳風に諷刺性を加え、独得の世界をひらいていった。俗事に対する異常なほどの興味が、大きな因と言ってよかろう。『文化句帳』から『七番日記』にかけて、おびただしい数の三面記事的見聞が挿入されている。それが、『八番日記』においては激減し、現実社会の直写が句の上にあらわれてくる。現実的事実を直写すること、それは時代や社会の不条理を直視して、それを告発することである。告発は、すなわち批判である。そこに究極の一茶調をみる、というのが私の考え方である。このことに目を向けることによって、俳諧史上の一茶の位置が明確になるのである。

2

身一つすぐすとて女やもめ[の]哀[さ]は

おのが里仕廻てどこへ田うへ笠(ゑ) (八番日記 文政2・2)

越後女の哀[れ]さを

鯛めせめせとや泣子負ながら (八番日記・文政2・6)

「おのが里」の句、『おらが春』には、「身一つすぐす迎、山家のやもめの哀さハ」と前書して、座五は「田植笠」。「鯛めせ」の句は、『おらが春』には、「越後女、旅かけて商ひする哀さを」と前書を改め、「麦秋や子を負ながら(わ)いし売」と改案してある。

「身一つすぐす」は、ただ自分一人が生きていく、の意。「女やもめ」は未亡人。夫に先立たれた下層農民の女性が、ただ自分一人の身を養うために、休む間もなく日雇い仕事に出かけて行くのである。「おのが里」、すなわち自分が住んでいる村里、その田植の時期、近隣の農家に雇われて、早乙女仕事に就いていた。水田の田植だから、水の都合でその仕事は2、3日で終る。もちろん自身が耕作する水田はない。「女やもめ」は、これから田植に入る地域にまた雇われて行く。菅笠を頭に、いそいそと「おのが里」を出ていく「女やもめ」の姿の直視・直写である。

「鯛めせ」の句、再案(定稿)は、「麦秋や子を負ながら(わ)いし売」。漁村において、海へ

出て漁をするのは男性の仕事であり、浜にあがった魚を籠に入れ、天秤棒でかついで売り歩くのは女性の仕事だった。雫のたれる籠を天秤棒でかつぎ、足早に売り歩く、そうしなければ鮮度を保つことができない。通常、その距離は2、3里にも及ぶ。麦秋、高温にして多湿、その状況下で乳飲み子を負い、重い荷をかついで売り歩くのである。生きるために、まさにそのためだけにである。

『八番日記』文政2年7月の条には、

二番休

乳呑子の風よけに立かゞし哉

の一句がある。「二番休」は、野良仕事などで、終業直前にとる午後2度めの小休息である。日はすでに西に傾き日没は間近、腰をのぼし、ひと呼吸入れてもうひとふんばりするのである。刈り入れどきの夕風は冷たい。そうしたなかで、時間とたたかいながら、農作業に当たる農婦。もちろん乳呑子と一体である。

涼風の吹く木へ縛る我子哉 (七番日記 文政13・3.5)

これは、田の草取りの時期であろう。子持の農婦が、よちよち歩きのわが子の腰に綱をつけ、それを涼風の当たるあたりの木に結んで、農作業に就いているのである。

華やかな化政文化の中に身をおいて、

春雨に大欠ビスル美人哉 (我春集 文化8・1)

手まり唄

下谷一番の顔してころもがへ (七番日記 文化10・4)

と詠んだ一茶が、信州帰住後に直視した現実的事実である。

春雨に大欠ビスル美人哉 (前出)

護持院原

木がらしや廿四文の遊女小屋 (八番日記 文政2・10)

- 下谷一番の顔してころもがへ (前出)
 二番休
 乳呑子の風よけに立かゝし哉 (前出)
 両国橋
 寒垢離ニせなかの竜の披露哉 (八番日記 文政2・10)
 堂庭乞食
 重箱の錢四五文や多時雨 (八番日記 文政2・10)
 木がらしやから呼されし接摩坊 (八番日記 文政2・10)

「護持院原の遊女小屋」「寒垢離ニ」などは、江戸生活の回想によるのだが、それらはいずれも「山家のやもめ」「いわし売」と対比的に発想されている。

3

「山家のやもめ」「いわし売」「廿四文の遊女小屋」の素地、すなわちこの作家の社会的関心を、女性にかかわる記述に視点を置いて拾ってみる。

- ① よべ子ひとつの^{ころほひ}比及となん、木おろしの画師なるもの、布川〔の〕里なる何がしの娘、男女はかりて^{さんげつ}三月の^(糧)粕など貧しからざる程、船につみツゝ川霧おひ重なる夜の紛れに、鬼一口のうれいもなく、いつちへか漕うせしとかや。(略)米みその類迄たらはざる事なければ、^(ひ)さながら彼大福長者の老をやしなふ工夫に似たり。もし恋の道におほやけあらば、是等は重罪人なるべし。

(文化句帳 文化1・9・12)

- ② 下ふさ布川の人となん、男女私に^{ひそか}ちぎりあひ故郷はうしろになして、おなじ国成田といへる里にしるよしありて、しばし忍び居たりけり。さてしも^{すつ}棄べき事ならねばとて、よく物をかぎ、よく物を見る男等をやとひつゝ、ほどなく二人得てかへりぬ。今はおのれしれる月船の宿をやど〔と〕して、夜も昼もくらしける。おのがちゝ母の家も遠からざるにわらひのゝしり、更には^(ち)づらふ色もなく、人のせざるわざなしたるごとく、みづから手柄顔にふれ歩くこそいみじけれ(略)。

(文化句帳 文化1・9・16)

③ 上野国きりふの里なみより一町ばかり引入りて、何がしの長者と見ゆる構ありけり。そこのすこし人離〔れたる〕あさら井のかたはらに、髪つや〔やかな〕る女の、紅のたすき今様にかきなして、さそふ水あらばとばかり打けはひツゝ、たゞひとり糸を染侍りき。かしこに咲る杜若のたぐひ、折からの風情を添へ、雲井をかける時鳥も、是がために恋わたるかとおもはれて、又なくあだあだしき面ざしにぞありける。又花げしの今かたほぞおちたらんやうなるえせ法師が、やけ野々雉のぬす立足して、とあるもの陰に忍びよりて、ひたすらそなたをかいまみけり。やがて女もうなづきツゝ、そこら見廻して口をむくむくして淡めくものを掌にはきて、〔卯の〕花咲る垣の間よりさし出〔しぬ〕。法師その淡めくものを、べらべら舌先の荒るゝばかりなめづりツゝ、日ごろの願ひかなひたるけしきして、おのれもかたのごとしてさし出しぬ。女も法師が手のひらのあはをおいらかにすゝりける。うちに主の声のほのかにしければ、女めくばせに、法師ひそひそ逃てけり。あはれ今しばらくあるじの声なからましかば、垣をやぶりていかなるたはれをばしいでてん(略)。

(文化3～8年句日記写, 文化3)

④ 下総国布川の郷、来見寺のかたはら田中の塚、菰四五枚引張て、酒しひる叟有。味噌するわらは有。あやしと木がくれてうかがひ侍るに、初孫まうけしなど笑ふ声して、いとゆうに志もやさしげなる青女の、麻といふもの髻にまき添へ、花なでしこの雨をおびたるさまに少打しほれてなやめる容の白地に見ゆ。(略)ある里人に問へば、是は此辺りの門に立て、一文半銭の憐みをうけて世をすごす古乞食となん。誠に其楽しむ所、王公といふとも此外やはあるべき。財たくはへねば、ぬす人のうれひなく、家作らねば火災のおそれもなし。(略)今宵は嫡子初七夜の祝ひに其党を集て、子孫長久いのるなるべし。

赤子からうけならはすや夜の露 (文化3～8年句帳写, 文化3)

①は、画師と駆落をした資産家の娘。それが身を忍ぶどころか、持ち出した親の資産で「大福長者」の老後のような豪勢な生活をしているという。一茶は「もし恋の道に公あらば、是等重罪人なるべし。」と憤慨している。

②も、駆落の娘である。見つけ出されて、連れもどされたのだが、反省の色もなく、「みづから手柄顔にふれ歩」いているというのである。一茶は『詩経』鄘風、桑中篇の「期我乎桑中，要我乎上宮，送我乎淇之上矣」をふまえ、「異国に『桑中に侍，きのほと(淇)』

りにおくる』といへるも、かゝる風俗なるべし。」とその風俗の乱れを難じている。

③は、「長者と見ゆる構」に働く、「髪つやゝかなる女」と「えせ法師」のつかの間の恋である。一茶は、「思ふにかれら垣へだてゝのふるまひは、あの世迄もひとつ^{うてな}台に乗らんといふいもせのしるしに、しかなせるならん。」としながらも、「なべてこのほとりのてぶりにや、いときたなきちかひにぞありける。」と結んでいる。「てぶり」は、手風。転じて風習の意である。

④は、「門に立て、一文半銭の憐みを受けて世をすごす古乞食」に初孫ができ、その「初七夜」の祝いを記したものである。一茶は、「今宵嫡子初七夜の祝ひに其党を集て、子孫長久いのるなるべし。」と目を細めている。

4

さらに『七番日記』に当たってみる、

① 下総に杖促さんとする折から、春の名残り棄がたく、三巡りの堤にかゝりてそこの宝寿山長命寺に参る。塚有。「西行に雨の宿かせ時鳥 亡夫左茗」として「妻妙葩建之」と石にゑりつけぬ。すべて女は髪のかざり、衣の粧ひにのみ心を勞するは常也けるに、思ひきや菩提はさら也、夫の名をさへ長く弘んとは。(略)

(七番日記 文化7・3・28)。

② (略)又寝乱髪のちりもはらはで、やうといふものに齒をすりつゝ、ぬり下駄からからならして、あちこそさまよふさま、夫十人ばかりもちたらんやうにいろいろしくぞ見へ侍る。しかるに坂の下より、男五六人糞たごといふもの拐の後前にゆひつけつゝ^(え)かさい鳥のなくやうに、ワヤワヤかたりけるが、程なく木陰に来かゝりて、女のかたはら過がたに「山の神けしかる朝起よな。雨もやふらなん。」などさゝやきけるを、はやく女聞とがめ、「おのれいしくもいひつるもの哉。今一度さのゝしりそ。しや首ねぢふせしや。足打折てやらん。」など、女ににげなきわろ口も、花の雪のちりぢり吹ちりて心に留るけはひもなく、皆々木の間の春げしきとはなりぬ。

下々に生れて夜もさくら哉

(七番日記 文化8・関2・29)。

- ③ 上総国百首の里は東南に山連り、西北に海聳て異国を防ぐに究竟の地なりとて、陳(陣)屋いとなむ繩ばりあらず。しかるにさし出て妨なる家あり。主と見へて翌をしらぬ(え)老婆ひとり、ぼつぼつ芋からむしをうみてぞ居たりける。奉行憐みて問ていはく、「汝、子ありや。」老婆いふ、「をのこひとり持たりけるが、いついつのとし故郷をよ所にふり捨て出たりしが、今は江戸といふ所に人のかみゆふわさをなすよし、風の便りに聞侍る。」と涙はらひはらひこたふ。「さあらば其男よび迎へよ。かひがひしき替地にはづかしからぬ家を立、そのみならず男には永く髪結頭のゆるし文をさづけ、汝には生涯二人ぶちといふをとらせて身をやすくくらさせん。(略)此家けふさはりになることとは天より汝に幸を下し給ふならめ。かしらに火のつけるごとく、とくとく爰を退き、かしこにうつりてよ。」とすゝめるに老婆むくむくはらだゝしきそぶりして、灯心束ねたらんやうなるつむり打ふり打ふりいふよう「よくもあざむき給ふもの哉。是はわらは先祖よりいく世ともなく住みなれて大事の大事の栖なれば、たとひ黄金北斗にとゞく程給るとも我目には虻蜂のさはぐとこそ思へ。たゞたゞ此はにふの小屋こそ宝なれ。よしや命たゝるとも外へは行かじ。」と手すり足すり、具を造りてよゝよゝとなきぬ(貞)。しぶときおこの者にぞありける。

(七番日記 文化8・5)

- ④ 下総国相馬郡藤代の里といふ所に百姓忠蔵とて朝夕けふたも絶へ間がちに夫婦持かせぎといふ事し、漸其日をくらしける。其中娘一人持たりけるが、(略)其娘たゞならぬ身となりてかりそめのなやみもなく九月三日といふに彼桃太郎をあざむく程のくりくりしたる男子をなんうみたりける。それさへあるに、乳のさくさく出ることのみぐち唇口ほその柄ぬきたらんやうにさばしる物から、父母のよろこびはさら也。界限の輩迄も打群がりていふやう、「いまだ井筒のたけにもたらで、かゝる愛度ためしはくらぶるものなし。」迎おのがさまざまとりはやしつゝ(略)祝ひておこせる産衣、又百文二百文、あるは五〔十〕ばかりの御ひねりといふもの白雪の降りけるやうにつみかさねて、所々山をなしぬ。二親久しき貧の病も忽に忘れて福々しき門とはなりぬ。誠是救世観音、彼者の子と現じてくるしみすくひ給ふならめ。げにげに竹の節ごとに黄金の出しと云ふ幸も是には過じと覚へ侍る。是うき〔た〕る説にあらず。我友月船わざわざ見にまかりける(え)に、露程はぢけふけはひもなく、手あそびの人形など貰(う)ふたやうによるこびて、しかといだきてはなさずとなんかたりき。

(七番日記 文化9・9)

- ⑤ 在赤沼村清左エ門ト云者、其息利左エ門下女イツに欲令奸陰、女其不順、其心依之(其女)令耻法外也。女為散今夜焼其家共ニ焼亡及三家。
其翌廿八日女自殺ト云也。 (七番日記 文化10・11・27)
- ⑥ 西巖寺坊守去二日夜依逃去事、今日集諸旦越相談ト云々。地中徳乗寺ノ僧去春彼坊守之蜜夫黒田玄機ト云医師、知有而坊守雖諫度々更ニ不入聞。悪事前二十倍如斯及逃去ト云々。然西光寺ト云己ニ密夫ノ味方ト云々。 (七番日記 文化11・3・15)
- ⑦ 申刻ヨリ大雷雨。石村ニ雷下テ家焼。浅野飾師ノ家ニ下ル隣家八衛門娘気絶。芋川要介ト云モノ、家及土倉其外焼亡。 (七番日記 文化11・7・6)
- ⑧ 於更科村些ノ口論ニ老婆ヲ打殺ト云々。是往古姥捨ノ嗅気残故哉。殺セル男辰トナ
ン云。 (七番日記 文化12・2・23)
- ⑨ 布川ニテ今夜妻夫ニ切ラル、一尺程。 (七番日記 文化13・12・2)
- ⑩ 小林勘五郎妻去る十七日産女子、今日死哀ナルハ赤子也乾殺ト云々。
(七番日記 文化14・8・20)

①は向島の長命寺に参り、左茗塚（現存）を見ての感想。塚に「妻妙葩建之」とあるのを見て、「すべて女は……」と記し、「世にあるうちも必松柏の操守りて、をし（注、鴛鴦）の衾のむつまじからんと思ひやられて、かすみがかくれの桜、闇にまがはぬ梅のそれとはなつかしく覚へける。」と結び、「はづかしや蝶は暮行春もなき」「はづかしや蝶はひらひら(え)常ひがん」の2句を添えている。

②は文化8年間2月29日、幕府の御用船天地丸を見物したときのことを記す文章とひと続きになっている。作者とおぼしきさる老法師が、切株に腰をおろし、たばこに火をつけようとしている。そのとき、「寝乱髪のちりもはらはで、やう（注、楊子）というものに齒をすりつゝ、ぬり下駄からからならして、」「夫十人ばかりもちたらんやう」な女性を通りかかる。「糞たご」をかついだ5、6人の男どもと行き交いざまに乱暴な言葉をかわすのだった。「しや首ねぢふせしや。足打折てやらん。」という女性の言葉に、「（男たちは）女に（注、似）げなきわろ口も、花の雪のちりぢり吹ちりて心に留るけはひもなく、皆々

木の間の春げしきとはなりぬ。」と結び、「下々に生れて夜もさくら哉」の一句を添えている。

③は、「かひがひしき替地にはづかしからぬ家を立、そのみならず男には永く髪結頭のゆるし文をさづけ、汝には生涯二人ぶちといふをとらせて身をやすくさせん。」という奉行の条件にも、「是はわらは先祖よりいく世ともなく住なれて大事の大事の栖なれば、たとひ黄金北斗にとゞく程給るとも我目には虻蜂のさはぐとこそ思へ。たゞたゞ此はにふ(わ)の小屋こそ宝なれ。よしや命たゝるゝとも外へは行かじ。」と先祖伝来の家屋敷を死守せんとする老婆である。一茶は「かく石のごとく思しめしたれば、今はせんすべなく、しひてなだめんも本意なしとて、ふたたび縄張りして、つひ其家をよけて地どりなりぬ。」と記し、「彼甘棠の下の政(注、善政のたとえ)もいかでか是にまさらんや。」と結んでいる。「石のごと」き老婆の意志が奉行の心を動かしたのだった。

④は少女の出産である。「朝夕のけぶりも絶え間がち」の夫婦が、娘の出産により、「福々しき門」となった。一茶は「誠救世観音、彼者の子と現じてくるしみすくひ給ふならめ。げにげに竹の節ごとに黄金の出しと云ふ幸も是には過じと覚へ侍る。」と結んでいる。(え)

⑤これは日記の記事である。男に辱しめられた女性・下女のイツの悲惨な生涯である。一茶は事実だけを記しているのだが、「其翌廿八日女自殺ト云也」に、真情が籠められている。

⑥これも日記の記事である。「坊守」は浄土真宗における住職の妻、その自坊における役割・立場をいう。これはその不貞を記すものであり、それに対する批判は記されていない。当然、前述の①③などと対照される。

⑦これも日記記事。落雷のため、「八衛門娘気絶」とのみあるのだが、風に破れやすき羅(うすもの)のごとき少女、その弱々しく、しかも敏感な心に心ひかれての記述である。

⑧これは老婆殺害の記事である。「殺セル男辰トナン」という淡々とした事の背後に、一茶の悲しみと激しい怒りが読みとれよう。

⑨一茶はここでもその理由を詮索せず、「今夜妻夫ニ切ラル、一尺程」とだけ記している。

⑩も日記記事。17日に生まれた女兒が、20日に亡くなった。「哀ナルは赤子也乾殺ト云々」とある。

5

『七番日記』以降、特に柏原帰住後の一茶は、泰平の御代における享樂的な生活をほとんど句にしていない。この時期、一茶が心を寄せたのは、庶民の哀歎と時代の底辺にうごめくようにして生きる弱者の生きざまや、その心情についてであった。

『七番日記』、特にその前半部には、いちじるしい数の稗史の見聞が挿入されている。このことはすでに述べたとおりである。本稿では特集のテーマに沿って、ことに女性について、『文化句帳』と『七番日記』に当たってみた。

こうした日記の挿入文は、『八番日記』に入って極度に減少する。そして、この時期その句風は諷刺ないしは諷刺的傾向から、現実の直視・直写に変わっていく。時代の片隅にあって、時代や社会を傍観していた一茶は、郷里帰住後においては、実質的にその構成員となり、リーダーとなる。それは彼の詩業に大きくかかわり、現実直視へ向わせるのだった。

現実を直視し、それを直写することは、そのまま現実的事実の告発であり、批判となるのである。このことについてもすでに述べた。

『文化句帳』からの①～④は、まさに稗史的世界であり、これはそのまま戯作の種ともなろう。これに比して『七番日記』からの抄出文章はいささか趣を異にする。ことに①の左茗の妻の志、③上総百首の里の老婆はともに哲学を持った女性である。そして、⑥⑦⑧⑨⑩は生きるための抵抗さえできないで、悲惨な生涯を送った女性たちである。一茶はそれぞれに対して、心を寄せたからこそ、日記中にそれを記したと見てよかろう。

「鯛めせめせとや泣子負ながら」「おのが里仕廻てどこへ田うへ笠(左)」と句帳に記すとき、稗史的挿入文はその影を消すことになる。この「鯛売りの女」「田植笠の未亡人」と『七番日記』の「左茗の未亡人」「上総百首の老婆」が無縁でないことは言うまでもなからう。

また、「木がらしやから呼されし按摩坊」「重箱の錢四五文や夕時雨」についても同様に言える。さらに、悲痛な現実を直視し、それを真っ向から詠む一茶の眼には、当然のごとく支配階級たる武家の横暴もうつつた。このことも見のがしてはならない。

《注》

- (1) 詳しくは拙稿「一茶調のゆくえ」(『解釈』1995.8所収)などを参照されたい。